

令和4年度 若桜町総合教育会議 議事録

1. 日時 令和4年11月24日(木) 午後1時30分から午後3時25分

2. 場所 若桜町保健センター2階 大研修室

3. 出席者 町長 上川 元張
教育委員会 教育長 新川 哲也
委員 伊井野 早苗
委員 福田 浩子
委員 森岡 則明
委員 永原 直子
オブザーバー 教育委員会事務局次長 小林 貴之
教育委員会事務局次長補佐 西田 彰訓
教育委員会事務局次長補佐 岡本 寛将
事務局 総務課課長 山口 由企夫
総務課課長補佐 車井 育子

4. 議事録署名人 委員 伊井野 早苗
委員 森岡 則明

5. 協議事項

- (1) 不登校の現状と対策について
- (2) 子どもたちの学力向上について
- (3) 高校生世代の地域活動の促進について

会議の経過概要

1 開会(山口総務課長)

2 あいさつ

上川町長 この教育会議は、町長と教育委員会が協議・調整することで両者が教育施策の情報を共有していき、執行していこうという趣旨で開催している。いろいろな意見を交換できればと考えている。

今日は3つテーマをあげさせていただいている。一つ目は「不登校の現状と対策について」。若桜町は少人数の学校でクラス替えがない、移住してきたお子さんがなじめな

いなど、子どもそれぞれの事情があるのだろうが、できれば学校として組織としてしっかり対応していただいて、ソーシャルワーカーやカウンセラーなどを活用しながら、一人ひとりに寄り添った形で支援ができるような仕組みができればと思ってあげた。

「子どもたちの学力向上について」は、学力だけがすべてではないが、子どもにとっても先生にとっても学習・勉強は関心が高いこと。県では少人数学級、30人学級に取り組んでいる。学園は小中一貫校であり、よりきめの細かい指導体制をとっているが、学力が伸びてこないという現状がある。学力調査の結果を見ると学年によってばらつきはあるが、小中一貫だからすごいなという傾向までは読み取れない。何か改善があればしていきたい。体制などが充実していて、成果として表れてくれればと思っている。また、学習支援として学校とは別に支援教室を行っているが、学習の底上げをしたり学習の習慣づけをしたりするものであり、継続していただきたいと思っている。ただ、もう少し頑張るって上に行きたいと思っている子どももいると思うので、そういう子どもに対応できるようなことも考えていく必要があると思う。例えば、英語に特化してALTを活用して英語教育を行っていく、あるいは受験生をターゲットにして学習塾などの支援をいただきながら、若桜に居ながら受験の対策ができるなど、若桜学園は少ないがゆえにこれだけ手厚く支援ができるんだということができれば、塾などで町外までいなくてもよくなり、親の負担軽減にも繋がり、若桜は、子育て支援も含めた充実した教育環境が整っているなあという印象になるのではと思う。

「高校生世代の地域活動の促進について」は、ふるさと教育、地元へ愛着を持っていただくような教育をしていくべきと考えている。若桜町には鬼ヶ城や重要伝統的建造物に指定された若桜宿など、貴重な文化財がたくさんある。昔は、遠足で鬼ヶ城に登ることもあったが今は学校の取り組みとしてどうなっているのか。地元の文化財をきちんと教えてそれに触れていくことは大事だと思う。この街並みを保存していくには、歴史からきちんと子どもたちに教えていくことが必要。自然についても、以前は八幡さんと校庭が一体となった遊び場となっていたり、川に遊びに行ったりしており、ごく当たり前に自然があったが、そういうことができなくなってきたと思う。町外の人には若桜の自然の良さに気づいて入ってくることもあるが地元の子供たちが自然の良さに気づいているのかと問題意識を持っている。自然が体感できるものを学校教育の中に入れていくことも大事だと考えている。高校生の世代の地域活動は、ふるさと教育の延長のようなものと思う。学園を卒業し高校生になると親も子も地域とのかかわりがなくなってしまおうという声を聞いたりした。総合計画を作るときにまちづくり委員会の中で聞いた意見のなかにも、提案として一項目はあった。高校生を中心とする若い世代が、地域のイベントを企画したり、まちづくり事業に参加したりし、大人との関係がしっかりできていれば、地域に愛着を持つことができ、進学などで県外に出ても若桜に帰ろうかなというような気持ちが沸いたり、Uターンに繋がったりするのではないかと考える。今日は、皆さんと意見交換をしながら、現状と課題などをお聞きしたいと思う。

3 議事録署名人の指名

上川町長 伊井野委員、森岡委員を指名

4 協議事項

(1) 不登校の現状と対策について

西田補佐 全国的に不登校児童生徒が増えている。若桜町も同じ傾向にある。地域の実態があり、その理由は地域性が関係していると感じている。不登校の数は、年間30日を超えて学校に通えていない子の数となっているが、この中には、適応指導教室やコミュニティスクールに通っている子も含めているため、出席扱いはしているが学校に通えていない子も含まれている。昨年度は小・中学生で合計5名、今年度は小・中学生で合計2名となっている。減少している中には、高校に進学した子や復帰した子がいる。この数の中には、フリースクールに通学している子はいない。適応指導教室で出席扱いになっている子もいる。令和3年度の5名の子は、全て状況は好転しており、引きこもっているということはない。高校への進学や学校復帰、適応指導教室への通学などしており、好転率としては100%となっている。今年度の2名については、1名は支援ができて好転しており、もう1名はこれから少し対策を考えていかなければならないと思っている。

学校の相談室登校については、学校の相談室に登校している又は教室と行き来しているという子が3名いる。この子たちには、アセスメントのうえプランニングをして支援しているので、少しずつ状況は良くなっているが、さらに好転させていくためどうしたらよいかを協議している。プランニングができるのは学校体制としてよい環境がとれている証拠。学校でも、個別のケース会議、校内適応対策委員会などで、複数の先生とソーシャルワーカー、カウンセラーが加わって毎月対策を協議している。誰がどのように対応していくのかを、スクールソーシャルワーカーが助言をしながら、それぞれの役割分担に沿って支援をしていく体制をとっている。令和3年度の好転率100%というものも、この積み重ねの結果だと感じている。教育支援連絡会では、保健センター保健師も加わり、家庭での支援がいるお子さんのケースを取扱いながら、個別で家庭の支援をしている。

適応指導教室の活用については、八頭教育支援センターの『みどりが丘教室』というものがある。若桜町では昨年度から学習支援教室『来未』(くるみ)を設置し、支援員を配置し通級している子を支援している。『来未』は、学習への意欲があり学習がしたいが学校には行けない子の学習支援をしている。『みどりが丘教室』は学習支援の面もあるが、基本的には、外に出るきっかけを作る、生活改善をする、人間関係を作るというその一歩目をつくる場所という風に思っている。今年度も、『みどりが丘教室』に1名通っており、『来未』と併用している。支援教室はマンツーマンでの指導となり、社会性の育ちが気になるが、『みどりが丘教室』を併用して通うことで、他町の学校の子どもたちと会い、元気が出て、学校に行ってみようという気持ちにもなる。昨年度通っていた子も併用していた。相談室についても、相談員を1名配置し、良い環境となっている。他町では、相談室はあるが対応できる職員がおらず、相談室に来て子ども一人

になってしまうというようなことが起こっている。相談員は勉強を教えることはできないが、子どもと会話し、気持ちを聞き取ってくれるなどし、適応対策委員会に情報をあげていただいている。

好転する子が多かったのは、先生が一人ひとりとしっかり向き合って、どういう対応が必要かを共有できていたことが大きい。人の配置というのは影響が大きいものと感じている。不登校の課題としてはいろんな理由があると思うが生活環境の変化だけではないと思っている。発達特性や怠学傾向で学習について行けず足が遠のくといったお子さんもいる。来年、『来未』に来てくれる子どもがいるかわからないが、『来未』などの環境を作っているからこそ安心して学校に行けるという子もいる。その中で『来未』の支援員が学校で相談室に来ている子に勉強を教えるといった形も必要なのかと検討している。いろんなお子さんがいるので、それぞれのアセスメントが重要だと思う。

上川町長 学校の体制について伺い、非常に充実した体制だと感じた。相談室登校とは保健室登校というイメージなのかと思うのだが、相談員を置きしっかり話を聞きとっていくことで、不登校になる手前で適応対策委員会につなげていく、あるいは、不登校になっても、『みどりが丘教室』や『来未』を併用していくことで、好転させていこうという体制が良く分かった。好転とは具体的にどういう場合をいうのか。

西田補佐 全く家から出られなかった子が、『みどり緑丘』に週に1回でも足を運ぶようになったということや、保健室にしか通えてなかった子が、少しでも教室に入れるようになったということなど。こちらがプランニングした状態に入っていくことを好転としている。不登校自体がなくなることだけを好転と取らずに、状況が少しでも良くなったことを好転ととらえている。

山口総務課長 最終的に年度末で好転率100%ということか。

西田補佐 途中せめぎあうこともある。3月を待って年度を終えたときに一人ひとり、好転したかどうかをみている。

福田委員 好転したお子さんでも、通学されるようになってからも行きたくない日とか出てくると思う。そのあたりは、不登校の時と同じように、西田先生や学習支援の先生方との人間関係やサポート体制は続いているのか。それとも担任にサポート体制が移り、今までとは違ったサポート体制になるのか。

西田補佐 事例になるが、昨年度の不登校のお子さんで、今年度中学生になり復帰した子がいる。ちょっと不安定なところがあり、月曜日になるとちょっとしんどかったり、テストになったり学習が難しくなるとしんどくなったりすることがある。『来未』に通っていた子なのだが、『来未』の在籍を外していない。家庭ともしっかり話をさせていただいている。ケース会議では、『来未』教室担当として私も入らせていただき、情報を共有させていただいている。学校とも話し合いをしながら、この子が次のステップに向かえるための協議の中でも、いつでも『来未』に来てよいという状況が、本人の安心感につながっているという話もしており、サポートは継続している。

福田委員 サポートが切れることが不安になると思う。学校に行くことが目標だが、それが達成された後は……。不登校中は、将来こうなりたい、今こうしなければだめなん

じゃないかとか、色々考える時間だったのではないかと思う。学校に行くようになって、後押ししてくれる先生方との繋がりは大変だと思う。不登校のお子さんは、学習の面もちろんだが、社会や人との繋がり、いろんな人と繋がる機会などそういうことが少なくなり、活力、刺激がなくなるということがありがち。保護者から、「『来未』にきて、色々な人に手当してもらい、学習も教えていただいて、いろんな人と関われるのでとてもありがたい」という話を聞いた。登校としているお子さんたちと同じようにはいかないの、もう少し何か、例えば、情報館であれば職員にも協力してもらえないかと思う。本を借りに行くだけでも世界が広がると思う。引率するのが難しいとは思いますが、芸術活動というか、課外活動的なものがあれば。たくみの館なども、いいものがたくさんある。そういうものに触れたり、運動の機会もある程度保障されるというと思う。不登校のお子さんでも、ICT活動はされているのか。

西田補佐 タブレットは学校で使っているものを『来未』に貸し出しており使えるようにしている。時間数が限られていることもあり、あまり使われていない。

新川教育長 『来未』の指導内容はどのような内容か。月ごとの実績は見させてもらうのだが、先ほど言われた情報館の活用や他の教育施設の活用、学校と連携しながら体育館等で運動するなど、色々工夫しながらされていると思う。指導内容を教えてほしい。

西田補佐 今年度の1名は受験生で、本人が受験勉強をしたいとの要望がありほぼ座学を行っている。不安定な状況で、毎日来れるかどうか微妙だった。昨年度は、合計3名がそれぞれ別々の時間に来ていた。たまたまそろったときがあり、一緒にスポーツをしないかと声をかけ、日にちを決め、町体で運動活動を試してみた。去年までは卓球やテニスなどもしていた。水泳などもできればよかったが、3人の体調のこともありできなかった。また、地域の方との関りでは、陶芸教室の方のご厚意で陶芸体験をさせていただいた。3人がそこで一緒に活動し、仲良くなった。マンツーマンでの勉強も大事だが、地域と関わることも大事。

伊井野委員 町長が言われたように、一昨年は不登校が増えているという声をたくさん聴いていて危惧していた。教育委員会内でもどうしたらよいのかという話を何度もした。学校訪問の場で意見交換を重ねていくことで、一緒に何とかしないといけないという気運が高まってきた。環境的な支援員の配置については、若桜町は十分にしている。学校を休んで学力が伸びない子どもたちに学力をつけてやらないといけないということで、昨年からは『来未』教室を設置していただいて学力面の支援をしていただいております。徐々に成果をあげている。先ほどの話のように、『来未』の教室も、ある時は一緒にスポーツをする時があったり、ある時は陶芸で何か作ってみたりと、たまにはいろんなことを入れたりすると、益々意欲が湧くのではないかと思う。課題の中のひとつにもある、子どもたちが「学校は楽しいなあ、毎日学校に行きたいなあ」という気持ちになるということが大事。学校に行って皆と遊んだり、友だち関係を築いたり、そういうことが子どもにとって大きなことだと思う。小さいころからほぼ同じメンバーの少人数集団で仲間や友だちが固定化し、「私が入るスキがない。疎外されている」と感じる子どももあり、なんとかならないかとも話し合ってきた。そうならないための

集団作り、仲間づくりというのが、学校で行う重大な教育ではないか。保育園から中三まで一緒に、その中で苦しむ子は9年間、若しくはそれ以上悩む子は多い。そういうことが少しでもないように何とかしなければと思う。また、移住してきた人が不登校になる割合が高い頃があった。溶け込みにくい、入りにくいという状況があったが、だんだんと改善されてきている。小集団の中で友だちを思いやる仲間づくりが大事だと思う。学習面では、ソーシャルワーカーや相談員などが一緒になって、月に1回は会議も開き、対策をしているという面では良い。仲間づくり、集団作り、お互いを思いやることが大切。

森岡委員 昨年度の不登校5名について、心配だなあと話し合いをしてきた。不登校もだが、少ない学級の中で、私も行きたいくないという声もあると保護者から聞いていた。そういう気持ちがまん延していったら良くないかと心配していた。実際は、そうになっていくことはなく、好転率100%と、一人ひとりに向き合い、いい体制を作ってくれていると感じた。これからも、初期の段階で、できるだけ早く対応をしていってくださることを願っている。

永原委員 若桜学園も、コミュニティスクールになったが、コミュニティスクールとは何かということが、みんなには浸透していないとか理解されていない。町民に色々お手伝いしていただいております、それはそれで一つの窓なので良い。情報館の職員がいちいち『この子がどんな子で・・・』という事を知らなくても、学校に行くような時間に来ても自然に対応してくれる。スポーツもそう。まちが全体的に容認する、温かく包む。学校じゃなくても、今この子は学んでいるんだという状況を受け入れるまちの雰囲気があるとちょっと違うのかなと思う。たくみの館で何かやっているときに見学に行くと、解説してもらったり、体験させてもらったり、学校の生徒として行くのではない、そういう学び方もあってもいいのかなと思う。学校に行けていないというのは本人も家族もえらい。今はこうやって学んでいる時期で、いつか学校に行きたいと思える時期は来る。今は心に栄養を与えている時期。学校にも学園委員会があるが、学校やこども園だけでなく、広く、行政など、いろいろな立場の人に入ってもらいたいと思っている。去年までふるさと創生課でしていた事業で、大学と行政が一緒になって町おこしをするための官学連携で、町おこしをするための企画を3年間された。とても良かったので今年もお願いしたいなと思ったが、課が変わってうまく伝わっておらず、教育のことなら教育委員会じゃないかと最初は断られた。でも、子どもを育てるのは、教育委員会だけではない。学校の施設を作ったり人を配置したり、そういうことはあるけれど、今の企画政策課にも、子どもを育てる視点はあってもいいのではないか。若桜は良いところだし、残ってほしいとか、帰ってきてほしいとかそういう教育との関わり方が行政にもできないのかと担当者と話をした。子どもも少なく、人口が少ない中で、いろんな人と関わることは限界がある。核家族も増えている。町の中に学ぶ場所があり、いろんな人との出会いがあるという学ぶ場の広がりも必要だし、行政全体としても必要なのではと思う。

新川教育長 コミュニティスクールの関係だが、地域の皆さんに学校と相談しながらコ

ーディネートしていただいて、米作り、習字、ミシン、裁縫、技術などいろんな地域の先生方に協力してほしい。やってもいいでと言う地域の人をコーディネートしてつなげることは、先生方にとっても子どもにとっても地域にとっても、良い流れができていくと思う。こういう活動を住民の皆さんに知ってもらえる機会が少なかったという事もあるので、情報発信して活動につなげていけるかと思う。新しく来られた先生方には、若桜の歴史等を知ってもらいたい。町内の鬼ヶ城とか不動院岩屋等を案内し、どういふところかを分かってもらった上で、子どもたちにも伝えてほしい。6年生の総合学習、子ども議会では、子どもたちが現状をこうしたらよくなる、これに困っている、そういうことを子どもたちなりに考えて、自分たちで改善に向けた取り組みを実践していくという事例発表の取り組み。毎年1～2月、役場の担当課長や議員に来てもらい聞いてもらう。

伊井野委員 中学校卒業までは、町内の関係者が不登校傾向にある子どもや不登校の子どもを支援してきている。しかしそれ以降、高校に入った時に、新しい仲間との出会いの中で、心も開放され、明るく張り切って学校生活が送れるようになった子どももいる。しかし、依然として不登校が続いていたり、新たに不登校になったりする子もあり、そのような場合、今度はどこが支援するのか。

西田補佐 昨年度のケースでもその話が出た。県の教育センターにあるハートフルスペースは高校生以上20歳くらいまでの支援をしている。去年不登校だったお子さんの保護者の同意をもらって進学先とハートフルスペースで連携させてもらった。その後の話は聞いていないが、他町の事例をみると、ハートフルと保健センターが連携をして、保護者面談をしたりしている。次へのステップのため私たちも意識していかないといけない。

伊井野委員 本人も親も、中学校卒業後は誰も支援してくれないというのでは困る。若桜町の子なので卒業後もきちんと支援して次のステップへ繋げ、引き継いでいくことが大事ではないかと思う。

森岡委員 地域との関わりというところで、自分も山登りや和太鼓で関わらせていただいている。ただ、不登校の子たちと関わっていないなと思っているところもある。学校に行きにくい子にこそ、和太鼓や自然体験が生かせるのではと思う。自然体験は山に行かなくても若桜ならどこでも体験できると思う。建物から一歩外に出ていくと、心が開けることもあると思う。声をかけてもらえば喜んで行く。不登校の子にこそ関わっていくことが大事だと思うので呼んでほしい。

永原委員 陶芸はどのようにかかわったのか。

西田補佐 声をかけてくださった。

永原委員 森岡さんが半日でも、「外を歩いてみようか」と言ってくだされれば、元気も出ると思う。

西田補佐 スクールソーシャルワーカーの仕事になると思う。繋げていくことも仕事の一つ。共有させてもらう。

伊井野委員 陶芸の方は、民生委員の主任児童委員さんで、学校との連携をもっとしたい

という思いがすごくあり、陶芸もしているし、子どもにさせてやりたいなということだった。よく心得た方だったので、あれこれ口出しをしないで、自分の好きなように作ったらいいと指導された。子どもたちも出来上がりをととても喜んだとのこと。学校と連携して、子どもたちのために何かしたいと思っている地域の人もいるので、協力してもらってはと思う。

(2) 子どもたちの学力向上について

山口総務課長 また後程、まとめてお話いただければと思うので、ひとまず次の議題に移る。若桜町の子どもたちの学力向上について説明をお願いします。

西田補佐 学力を見るということで、資料となる物として、全国学力・学習状況調査ととっとり学力・学習状況調査というものがある。とっとり学調は個の伸びを見ていたり、クラスでの指導の在り方をみていたりするもので、あまり平均をとってみていくものではないと思う。小学校6年生と中学校3年生を対象としたのが全国学力調査で、国の事業。小規模校だから個に応じた指導が・・・という強みが顕著に出ているかというところまでは見られない。少人数なので、年年でかなり変わるが、大きな傾向として3つ挙げている。まず二極化傾向があるという事。それから、この学力調査の特徴として、かなりの量の文章や資料を読んで、自分の考えを含めてまとめるというものがある。その中で条件作文というものがあり、条件を3つくらい与えてその中で作文を書くというものだが、この無回答率がやや高い。何か書いているわけではなく空白となっている。読み切れなかったのかあきらめる傾向がある。他に、ここ数年の全国的な状況で、若桜学園だけみても顕著だったのが、生活リズムが安定している学年が比較的平均を上回っているということ。例えば今年度の小学校の結果でいうと、朝食を食べない、メディアコントロールができていない傾向がみられていたので、平均値としては低めに出ている。中学3年生については、生活リズムが安定していて、メディアを見る時間が自分でコントロールできてきたという事がぐっと上がっている。学園での学力向上の取り組みについてだが、何か突出して取り組んでいることはないが、まずは県の学力向上の実践という事で、県下全域で取り組んできた。eライブラリーも活用してきたが、まずは家庭への啓発をしっかりとできるようにしようという事で、『啓発下敷き』を作って配布した。家庭学習の約束を盛り込んでいる。校内研究では、協同学習の取り組みを行っている。子どもたちが主体的、対話的に取り組むという事を行っているが、見ていると、先生の講義型になっている傾向がある。小中一貫校なので、教科に絞っての研究は難しいように思う。小学校だけなら、2年間算数に特化してやろうとかいう事もできるが、中学校は教科担任なので、そうなるできない先生もいる。ただ、先生同士で、授業を見合って、公開をして助言し合うという事にここ何年か取り組んでいる。英語力の向上では、実績等確認していないが、国の補助事業で無償でやっている事業がある。オンライン英会話と言って一人1台端末を使って、海外の英語を使える国の大人と学習で学んだ英会話を使って会話をするという授業。来年度するかどうかについては、学園と話ができていない。あと、学力調査を生かして校内研究をして、先生方も学級経営

へどう生かしたらいいのかと参考になっている。家庭・地域の取り組みについてだが、町学力向上事業として、放課後学習支援事業やサマースクールなどを行っている。年度の実績をあげているが、学習の習慣をつけたり、復習に取り組んだりしている。平日の放課後だと中学生はなかなか取り組めないで、テスト期間中に開催している。ちょうど、テスト期間の1週間開催したところ、1週間たった後、9年生の方から、「これで終わりか」と声があった。受験に向けてもう少しやりたいという自発的な声が出たので、9年生に対して冬休み前とその他何回か開催日を設けてみようかと検討している。成果と課題だが、放課後学習についても課題はたくさんある。放課後学習をみていると、ノルマのようにしているんじゃないかという印象を受けた。この子どもたちは何のために何を目指して勉強しているのかというのがもう少し見えてこない。中学校の8年生くらいになると受験という事が見えてくるけれど、その先のことを意識しているのかなど。公営塾のことも挙げているが、求めるところと求められるところが違うと感じており、ニーズ把握は必要だと感じている。例えば、東大や京大を目指すなら、それなりの塾に行かないと多分対応できない。子どもたちによって求めるところにすごく差があって、それがどれくらいの割合でというのが分からない。高校受験をゴールにしている子が多いんじゃないかなという印象を受ける。公営塾については、ニーズ把握が必要。

山口総務課長 只今説明があった子どもたちの学力向上について、ご意見ご発言があればお願いします。

伊井野委員 課題と今後の対策に、二極化への対応とあるが、躓いている子に対して、授業の中でどのように指導していくか。放課後は時間がないので、授業の中で個に応じた指導をどう組んでいくかが課題だと思う。授業研究をしているとあるが、授業の中でどの場面の改善が必要かを明らかにして授業改善を目指すことが大切。また、新しい学力感を支えるための基礎基本の習熟が大事。繰り返し、定着するまで頑張ってみようという主体的な子どもの姿勢が大事。少人数なので、児童生徒の実態は大規模校に比べれば先生も一人ひとりきめ細やかに把握できている。小規模校のメリットを生かして個に応じた指導をどの時点でどのようにしていくのかが課題となっていると思う。

福田委員 個別の一人ひとりの最適化された学習を支援するという事で、以前日本海新聞に青翔開智の取り組みが載っていたので、それを少し紹介したい。先生がモニターを持って、みんながタブレットを持って、数学で方程式を解くという時間だったが、先生の合図で一斉に解き始め、個々が自分のペースで問題を解いていくものだった。正解するとどんどん次に進み、長い間手が止まる子がいると先生が声をかける、又は生徒の方から自主的に手をあげて先生を呼ぶ。その他、生徒が互いに教えあいながら進めるという記事だった。できる人はどんどん先に問題を解いていき、能力に応じたたくさんの学習ができる。できない子、わかりづらい人は、仲間と教えあいながら進める。自力でできないときは、先生が助けに入り教える。それが先生の端末に記録として残っていく。先ほど話に出た躓きに焦点化をするという事も、記録に残っていくのでできると思う。個に対しての躓きが記録に残ることで、次回課題ととして出す、繰り返し授業で行うな

ど、具体的な対策ができるのでは。AIの教材を活用することで、個別の指導が少し整理されて、1対多数の生徒でもしやすくなっているのではないかという印象だった。学園はどうだろうか。

西田補佐 AI教育については、青翔開智を見させていただいた。非常に先生方が長けている。それを今の最先端ととらえたら、公立の学校はほぼ遅れている。県教委が言われていたことだったと思うが、それが、今ここにきている子に合う教育スタイルかどうかは非常に判断がしにくい。青翔開智は、非常にプレゼン力が高く、受験して入ってきた子たちなのでそれに対応できる子たち。基本、自分から学ぼうという気持ちがある子たち。その問題が非常に大事で、そこに行きついていない子が多いのかなと感じている。すごく差がある。取り入れたら全てが成功するかと言ったら、私は難しいかなと思っている。見極めをしてからスタートしないと、AI教育は難しい。

福田委員 まさに発信力が欲しいというところが、先ほどの作文無回答があるとかの部分。英語の学習においても、発信力が低いという事だったと思う。書くとか話す、自分の考えとまとめて表現する力、動機を育てるような取り組みが必要なのかと感じた。

伊井野委員 躓きがある子だけに焦点がいくのではなく、できる子にはさらに、高い課題を出し、向かえるような個々に合ったものを。チャレンジ意欲を持たせて上を目指す、個々に合わせたということが大事だと思う。

上川町長 普通の授業では、担任の先生と副担任と二人でされているのか。そういう体制がもしあれば、授業を進める中で、少し躓いている子とできる子とを分けながら対応していけると思う。どういう体制になっているのか。

西田補佐 学年や教科にもよる。特に小学校の算数は差がすごく出るので、別の部屋でクラスを分けてしている。いいなと思ったのは、子どもたちが、進んでいるそっちの部屋に早く行きたいという気持ちで取り組んでいるところ。そういう場面はいいなと思う。ただ、国語は分け方が難しい。あと、算数はできても中学生の数学になるとそこまではちょっとできない。

永原委員 中学生を習熟度で分けるのはちょっとできない。プライドがあるので。分けた上のクラスはいいが、そうじゃないクラスの子の意欲をそいでしまう。できる子は本当にすぐに進む。できたら次、次というように、指導者が先にいく子のように退屈させないような準備する必要がある。

森岡委員 英語力の向上というところで、何年か前に、全国のモデル校をしていたと思う。小学校で英語が教科化するというところで、いいことに取り組まれているなど当時思っていた。その成果は見えているのか、少し疑問に感じている。何が良くて何が反省点なのか、振り返りながら進めていかないと、せっかくモデル校として取り組んだことが、あまり今の成績に繋がっていないんじゃないか。

永原委員 当時、学校にいた。小学校の英語が教科になるという前段で。一貫校でいいなと思ったのが、中学校の英語の先生がいて、担任がいて、ALTがいるところ。子どもと授業を繋ぐのは担任。ALTと担任を繋げるのに、専科の先生が入っているとうまくいく。授業のペースを回すのは担任、でも、テープレコーダーのようにALTを活用し

でもダメ。一緒に授業を立体的に作っていく、そうなる場合に、英語の堪能な中学校の専科がいて、通訳などしてくれるのは、若桜はちょうどいいと思ってみている。小学校の先生も安心できる。今までできていない英語が喋れない不安や、話さなければならぬという負担感を感じなくてよいと思っていた。数年後、それがどういう結果に出たのか、見届けていない。その頃見ていた印象では、活気もあり、子どもも楽しそうで、小学校に英語が入るとこんな風になるのかと良かった。小学校の授業に専科の先生に出てもらえるところは一貫校の良さと思った。

森岡委員 生かしていないのか？

西田補佐 英語については、小学校の教科化の移行期が終わり教科となったが、全県、うまくいってない。小学校での外国語活動としてそのままきいて、小学校での教科という意識が薄いと感じている。中学校の先生も、小学校ではどんなことをしているのかを知らないといけぬ。中1の英語がすごく難しい。難しいというのが、小学生の積み重ねがないと難しいという事。英語が一番二極化があつて、英語の塾に通っている子は、すごく高いが、英語を中学校に入ってから学校だけでしている子は、中学校に入った段階で英語嫌いになってしまっている。オールイングリッシュを求められているが、さっぱりできないという状況。県にも相談しているが、何らかの手を打っていかないとと思っている。中学校1年生は、100点が多いグラフになっているはずだが、均等の横並び。こういうことが起こっていることを県もようやく気づかれた。来年度は、ちょうど移行期にはまっていた子が中3で、学力検査で英語が入る。6年担任は、1月に英語の研修をしようかと検討中。中学校への上手な引き継ぎをできるように中学校にもかかわってもらふなど、一貫校の良さを体制として考えてもらふ必要がある。英語は、先進的に取り組まれていたところがリセットされている、むしろマイナスになっているかもしれないという状況。

新川教育長 県との連携という事で、指導主事が訪問して授業をみて先生方にアドバイスをしている。先生によって一概には言えないと思うが、学園の指導方法はどうか。学園は協同活動などをずっとしているが、そのあたりの捉え方や評価はどうか。

西田補佐 県の評価としては、共同学習に取り組んできた割には、コロナのこともあるが、先生が講義型で指導していることが多いかなと学園の管理職の先生にも話をされている。何人かは、学び合いを大事にしておられる先生もおられるが、その共有化ができていない。少人数なので、先生がしゃべってしまう。そこは待つて、子どもに語らせないとだめ。学習場面ではないが、学習発表会を見たときに、9年生が感想を言ったときの言葉が気になった。「めちゃめちゃ良かったです」といったことを3人が言った。これは9年生の言葉ではないかと思つていて、八頭中の子がこれだったらダメ出しされると思うし、自分が担任でもダメ出しすると思う。何が良かったのか、どこに感動したのが9年生ならその場でぱつと言えないといけぬ。そして、それを誰も指導しないという事が一番の課題。そこに課題意識がない、流してしまう。せっかく縦割りで生活しているなら、9年生は9年生の言葉で言つてもいいんじゃないか。そういうところが、言葉の力だと思う。

新川教育長 授業改善もそうだし、家庭学習、eライブラリーの活用というのもどの程度か。鳥取学調については、分析シートがあるはずなので、この辺の活用化。自分でも保護者でも。子どもの教育はまずは家庭からしていくものと思っている。西田先生もたよりを定期的に出している。これも良いと感じている。家庭でも興味を持ってもらって活用していただくことが必要。

(3) 高校生世代の地域活動の促進について

山口総務課長 3点目の高校生世代の地域活動の促進について、説明をお願いします。

小林次長 以前は高校生のボランティア活動があったが、先細りとなった。中学生まで範囲を広げ活動を続けていたが、平成20年ごろには活動が中学生中心となり、平成24年ごろには活動が休止となった。当時、高校生が2名程度、中学生が3名から7名程度だったと思う。当時の活動内容は、町のイベントに運営スタッフとして参加するというもので、活動は年4回程度行っていた。地域活動参加への取り組みについてだが、高校生が地域活動に取り組むことは、地域づくりや青少年育成の観点から意義のある活動だと考えている。高校生ならではの行動力や、固定観念にとらわれない柔軟な発想力は、これからの地域づくりに必要。地域の方との関りや体験を共有することで、自己有用感を育むことが期待できるため、この体験が高校生にとってこれからの社会で生きていくための力になると考えている。高校生の地域活動を進めていくためには、高校生の学校における生活状況や日常における地域との関わり、地域活動への意向ニーズを把握し、実態に合わせた取り組みを検討したいと思う。町内高校生のアンケートを実施し、地域活動参加へのあり方、課題について検討する。アンケート調査の素案を添付しているのでご覧いただきたい。3つ目の近隣の状況だが、岩美町、智頭町は、今現在の活動の実績はない。八頭町においては、高校生の活動はないが、中学生によるグループ活動があり、地域のイベントへの参加や手伝いを行っている状況。

山口総務課長 高校生世代の地域活動促進について説明があったが、意見があれば発言をお願いします。

森岡委員 高校生の関わりが今しにくい状況にあると感じている。青少年育成アドバイザー、公民館活動の中でも、そういう子をどう引っ張っていくのかと話が出る。公民館やナティキッズの中でやっていたが、コロナで無くなった。ナティキッズでは、中学生ボランティアを募集しようという事で、イルミネーション設置ボランティアを募集したところ、5～6人参加してくれた。そこを元として広げていくのがいいのかなと思う。そこが中心になるのか、どこが中心となるのかわからないが、高校生の力を大事に広げたいと思っている。いいやり方や方法があれば、進めてもらいたいと思う。アドバイザーの中でも声は上がっているなので、協力はできる。声をかけていただければみんなで取り組めると思う。

岡本補佐 実際、高校がここにはないという事が大きいと思うし、時間的制約が厳しいという事もあり、年々子どもたちの数が減少するにつれて、活動を縮小していった。私たちも課題意識を持っている。個々に参加できることがなければ、まずは住んでいる地域の

行事に顔を出すことから始めてもいいじゃないかという事で、公民館長会等で、年間行事の際に毎年、子どもたちの活動の場を作ってもらってそこに声をかけてくださいという呼びかけを継続的にしている。実際地域で活動参加ができているかどうかの把握はしていないが、最低限、そういうところから人を知っていくことが大事かなと思っている。近年は、地域学校共同活動を始めさせていただいて、地域の人と顔を合わせる機会ができてきた。これを継続的につなげていく。イルミネーションにも子どもたちが出てきてくれたので、まずはその子たちが何かできることを考えて形作っていくことが、再スタートだと思う。

永原委員 高校生のボランティアはいいと感じている。八東に住んでいた時、資源回収があった。中学生だったが、お兄ちゃんが車に乗ってお手伝いに出てくれて、よく手伝ってくれた。そういう子が何人かいて、頼もしいと感じた。こうして地域が縦に繋がっているなと感じた。八東中学校が閉校の時、閉校行事をさせてほしいと卒業生が校長先生の所に来て、させたと言った。その当時は、八東にアウトローという高校生のボランティア団体があった。それがずっと続いていて、名前が変わった時期もあったが、そういうものの残り火というか、地域の中で動ける大人として残っておりいいなと思った。学校だけでは大きくなれないというか、地域や世の中とどこかで繋がって、知らない大人に褒められたり、使ってもらったりしながらじゃないと育たないなあとその時に思った。若桜は子どもは少ないし大変かもしれないけれど、ささやかでも動き出すことは良いことと思う。

森岡委員 中学生までは関わりがあるが高校生になるとどう関わってよいか、関わりたい生徒たちも多分いるのだろうが高校生自身も分からない。こちらも、高校生は忙しいからと声をかけづらい。参加したくても行ける雰囲気ではないという状況なのでは。もっと気軽に声をかけられるとよいと思う。

永原委員 お茶を飲みに来るような雑談スペースから始められたら。自分自身共同活動のボランティアをしていて、自分たちも仰々しく頼みに行くのだけれど、本当は、サロンみたいなものでしゃべって帰るような場所が学校の一角があればよいと思う。堅苦しくないようないいものがないかなど。ふらっといけるというか。そういう場所には人もいるだろうし……。どうしたらいいか。部活もしているだろうし。

森岡委員 きっとしたい子もあるはず。アドバイザーの会も年4回している。去年高校生にも直接ではないが、町の広報に入れて呼びかけたがあまり効果はなかった。町報だと高校生に届かないので声をかける方がよい。

岡本補佐 駅に立ってチラシを配っても高校生は避けてしまう。

森岡委員 世間話などからそういう話ができるとういのもかもしれない。

永原委員 高校生は頼もしく、見るだけでも元気になる。

森岡委員 高校生は大人よりも動いてくれる。

新川教育長 今年から成人を祝う集いを開催する。高校を卒業して2年経った子が実行委員になってしてくれる。主に地元に残っている子が中心となっている。そこに、高校生が参加するわけにはいかないだろうが、こういうものがとっかかりとなるので

は。先ほどの話のように、そこに、たまり場的なところを作るのも良いのではないか。時間を決めてこの日の何時にというのではなく、コミュニケーションが取れる場所として、あそこに行ったら誰かいるというスペースがあっても面白いかもしれない。

上川町長 南部町の例になるが、高校生ボランティアがあつて、町の年寄りのまつり等イベントごとに参加されている。高校を出てからも何か繋がりがあり、昔でいう青年団みたいなものに引き続き入って、20代～30代の頃からまちづくりにも協力されている。以前、西伯小学校の先生をされていた方が町の教育委員会におられて生涯学習をされていた。小学校の卒業生も、先生がおられるから行きやすい。教育委員会にもかなり長くおられて、その先生を中心にみんなが集まって来るというような関係ができています。そういう方がおられるとすごく集まりやすい。こういう場がサロンの的に広がっていくような環境を作れたら。

(4) その他

山口総務課長 その他ご発言はよろしいか。その他でも。

永原委員 少し気になっていることがある。今一貫校で、ブロックが4年、3年、2年になっている。これが、別々だったら5年生は結構大人。これから先、6年を送る会を自分たちがしなければならぬし、一番大人になっていく時期。担任の先生も来年は最上級生でこの子たちが学校を動かすという気持ちで育てる。そういう風に大きくなり、中1になるとまたかわいくなる。でも今はそういうストーリーじゃない。5年生が末っ子になり守られるばかりで、精神的にも、小学生のリーダーとしての気持ちが育ちにくいのではと感じている。6年生も、6年生らしさを発揮できるところが登下校の班くらいしかない。行事なども全員ですから特に。7年生も中学生になったっていう感じよりも、6年生の下の子に気を付けなければならぬという感じで、中学生になったという感じが足らないように思う。学園ができて10年くらいたつが、この4・3・2のブロック制はほんとに良いのか。大きな問題だが。時々、小学生だけの行事、中学校だけの行事があつても良いのではと思う。一貫校だから、みんなで何でも一緒としなくても良いのでは思うとこともある。今は、いち町民としてみているだけなので、中におられる先生たちの思いもあると思うのでわからない部分もあるが。小中一貫校と云ったら、必ず小学校と中学校を混ぜないといけないという事に、あまり縛られなくても良いのではとも思ったりする。ずっと思っているだけなので、どうこうしてほしいというわけではなく、皆さんはどう思われているのかなと思つての意見。

山口総務課長 全国的な傾向等は。

西田補佐 当時一貫校になる時の説明会の資料だと、それじゃないと一貫校の意味がないと言われたというのが最後の決め手だったらしい。義務教育学校ができていの中で、この割り方の方が多い。永原委員がおっしゃる通り、5年生は3学期には「6年生になるんだ」という気持ちを育てて、6年生を送る会を実施するという事を経験させて6年生になる。6年生になった子たちは、初めの1箇月は疲れる。確かに、そういう経験がなくそのまま育ってしまう環境になっているところは、他の小学校と小学生の育ち

が違うと感ずるところ。

永原委員 なぜこういう事を言うかという、そういうことが学力や生きていく力にとっても関係しているのではないかと思っている。小さい組織でも集団でも、リーダーとして先頭に立つという事はとても大変なことで、それを動かしていくという経験をせずに中学生になる。その辺が、勉強するだけの頭だけでなく、学力や学ぶ意欲を支えるのではないか、表現力の幅や豊かさに繋がると思った。

伊井野委員 学校の先生方がどのようにとらえているのかも大事。子どもの実態を見て、本当に4・3・2で良いと思っているのかどうか。

上川町長 変えることはできるのか。

西田補佐 変えることは可能。ただ、仕組みを変えとなるとかなりの労力が必要。いろんなものを変えていかないといけない。子どもの中では、制服が変わる体操服が変わるということで、一貫校の中でも6年生が切替で、それで不登校を克服できた子もいるくらい。中学生になると部活も始まる。子どもの中では小学校は小学校、中学校は中学校という意識もあると思う。

永原委員 一貫校になる頃に全国的にもすごく多かったのが中1ギャップ。中1ギャップの解消に一貫校はいいのではないかと当時すごく言われた。でも、ギャップはいると言われる先生もあり捉え方でもあると思う。ずっと湯水に浸って生きていけるわけではないので、「よいしょ」というところもいるのではないか。

新川教育長 小学校の卒業式はなく、立志式があり、決意を新たに自分の思いを言ってもらう。高1ギャップはあるのか。高校に入った途端周りは知らない人ばかりで、心細い思いをして行っているのか。

西田補佐 SNSで繋がっていたりして、既に知り合いだったというケースも多く、以前ほどないと感じている。塾の友だちとかで八頭中と繋がっている子も多い。いろんな意味で広域化しているところに入っている子はそれがない。

新川教育長 うまく高校に進めれたらいいけど、躓いて高校に通えないとドロップアウトしてしまう。そういう子の対応を担当するところはあるのか。

伊井野委員 今までは何ともなかったのに、高校になって不登校になったという事を最近聞くか。

西田補佐 自分のやりたいことが別にあったりしてやめたというのは聞く。不登校は、ここに来てからは聞いていない。友だち環境より家庭環境の影響で不登校傾向という事はある。

伊井野委員 以前は高校に入ってから不登校になったという事を色々聞いていて、同じ仲間の集団で中学校までいくから、そこからのギャップが大きいのかと思っていた。逆に、9年間一緒に、狭い友だち関係から新しい友だち関係に飛び込んで、ぱっと自分の心も開けて友だちもできたという話も聞く。それぞれかなとは思う。

山口総務課長 最後に町長から。

上川町長 忌憚のない意見をたくさんいただいて、現場の悩みや現状が十分勉強できた。特に不登校については、学校が全てだと思ってしまうと煮詰まってしまうのだが、地域

の中に学習の場として受入れる場がたくさんあるという事が、その子の居場所が他にもあるんだという事になり救われると思う。地域が育てていくという関係になっていけば、たくましい若桜っ子になっていくのではと思う。今日はありがとうございました。

5. 閉会（山口総務課長）

上記議事の顛末に相違ないことを証明する。

令和 4 年 12 月 2 / 日

議事録署名人

伊井野早苗

議事録署名人

森岡則明